武蔵野日曜聖書講筵

源泉

――エレミヤ記第2章1～13節――

１９７４年１月27日
小池辰雄

自ずから道を伝える　花嫁の時の愛　愛に対するに愛をもって応える　神性をおび神さびている　神はいずこにあるか　御霊の水の源泉　水ためは即ち文化文明　御霊の神わが内にいたもう　源泉を汲めばこちらが泉の存在

【エレミヤ2】

1エホバの言我にのぞみていう 2ゆきてエルサレムに住める者の耳につげよ エホバ斯くいう 我汝につきて汝の若き時の懇切 なんじが契をなせしときの愛 曠野なる種播かぬ地にて我に従いしことを憶ゆと 3イスラエルはエホバの聖物にして その初に結べる実なり すべて之を食うものは罰せられ 災にあうべしと エホバ云いたまえり 4ヤコブの家とイスラエルの家の諸の族よ エホバの言をきけ 5エホバかくいいたもう 汝等の先祖は我に何の悪事ありしを見て我に遠ざかり 虚しき物にしたがいて虚しくなりしや 6かれらは我儕をエジプトの地より導きいだし 曠野なる岩穴ある荒れたる地 旱きたる死の蔭の地 人の過ぎざる地 人の住まわざる地を通らしめしエホバはいずこにあるといわざりき 7われ汝等を導きて園のごとき地にいれ 其実と佳物をくらわしめたり 然ど汝等此処にいり 我地を汚し 我産業を憎むべきものとなせり 8祭司はエホバは何処にいますといわず 律法をあつかう者は我を知らず 牧者は我に背き 預言者はバアルによりて預言し 益なきものに従えり 9故にわれ尚汝等とあらそわん 且汝の子孫とあらそうべしとエホバいいたもう 10汝等キッテムの諸島にわたりて観よ また使者をケダルにつかわし 斯のごとき事あるや否やを詳細に察せしめよ 11その神を神にあらざる者に易たる国ありや 然るに我民はその栄を益なき物にかえたり 12天よこの事を驚け 慄け いたく怖れよとエホバいいたもう 13蓋わが民はふたつの悪事をなせり 即ち活ける水の源なる我をすて 自己水溜を掘れり すなわち壊れたる水溜にして水を有たざる者なり

（口語訳）

1主の言葉がわたしに臨んで言う、2「行って、エルサレムに住む者の耳に

告げよ、主はこう言われる、わたしはあなたの若い時の純情、花嫁の時の愛、荒野なる、種まかぬ地でわたしに従ったことを覚えている。3イスラエルは主のために聖別されたもの、その刈入れの初穂である。すべてこれを食べる者は罪せられ、災にあう」と主は言われる。4ヤコブの家とイスラエルの家のすべてのやからよ、主の言葉を聞け。5主はこう言われる、「あなたがたの先祖は、わたしになんの悪い事があるのを見て、わたしから遠ざかり、むなしいものに従って、むなしくなったのか。6彼らは言わなかった、『われわれをエジプトの地より導き出し、荒野なる、穴の多い荒れた地、かわいた濃い暗黒の地、人の通らない、人の住まない地を通らせた主はどこにおられるか』と。7わたしはあなたがたを導いて豊かな地に入れ、その実と良い物を食べさせた。しかしあなたがたはここにはいって、わたしの地を汚し、わたしの嗣業を憎むべきものとした。8祭司たちは、『主はどこにおられるか』と言わなかった。律法を扱う者たちはわたしを知らず、つかさたちはわたしにそむき、預言者たちはバアルによって預言し、益なき者に従って行った。9それゆえ、わたしはなお、あなたがたと争う、またあなたがたの子孫と争う」と主は言われる。10「あなたがたはクプロの島々に渡ってみよ、また人をケダルにつかわして、このようなことがかつてあったかをつまびらかに、しらべてみよ。11その神を神ではない者に取り替えた国があろうか。ところが、わたしの民はその栄光を益なきものと取り替えた。12天よ、この事を知って驚け、おののけ、いたく恐れよ」と主は言われる。13「それは、わたしの民が二つの悪しき事を行ったからである。すなわち生ける水の源であるわたしを捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものだ。」

●自ずから道を伝える

……。実践的に伝道を、パンフレットを配ったりする。その効果はどうでもいいんです。自(おの)ずからそういうようにしていたということが、

「汝のパンを水の上に投げよ」

と、いつそれが本当に果が結ぶかは神さまの側で、一向差し支えない。どうぞ、結果はひとつも心配はいりませんから。溢れるものはどこででも恐れなく証していく。大体、けなされたり拒否されたり、あるいはある時は迫害されたり、いろんなことに遭うのがキリストの弟子の道なんだから。調子よく行かないとか行くとか、そんなことはもはや問題でない。皆さん、それぞれの持ち前の味でもって、勇ましくやってください。何をしていても、それが自ずから発するということはそれ自身が――伝道なんていうことを意識しなくていい

んです――それが自ずから道を伝えることになっている。

手島さんの群が「原始福音」という週報を出している。「週間原始福音」という非常にきれいな雑誌。これをちょこちょこ読んでいると、ある会員は必ず毎回、一人連れてくるという。そういったような気魄でもってやっていて、どこの幕屋でも大体溢れて困るくらいになるのがその常態らしい、別に私はその現象をどうのこうの言うのではないけれども。

私の集会は小さくていいんです。いいけれども、私の集会そのものよりも、今はあなた方はヨルダン、サフランのご連中は聞きっぱなしだって構いません。けれどもやがて、まぁガリラヤの連中は――今日は誰もいないか――本当はもうせめても土曜かあるいは木曜か水曜あたりに自分でもって夜の集会でもおっ始めて、やってもらいたいんです。私は手島さんみたいに命令はしませんけれども。まぁ手島さんというのは気性が烈しいですから、何かこれを読んでいると、「集会聴講停止」なんていうのがよくある、謹慎なんていうのが(笑)。まぁそれはともかくも。しかし、そういったお叱りをくらった後が、またこのご連中は展開している人がよくみえます。なかにはあまりでっかい声して祈るから、

「お前、そんなのはダメだ。祈りというのは上からのものを受けとるんだ。こっちからただ熱っぽく迫ったって、そんなのはダメだ」

なんていって、叱っているところもありますけれども。

私たちの角度は非常にいいものがあるので、元日の私の話を聞いて、手島さんのところの連中が相当驚いたらしい。帰りの自動車の中でもそう言っていました。

「また、先生、ぜひひとつお願いします」

なんてやっていました。まぁ私は軽々しく動きませんけれども。どうぞ、この福音は千変万化してあなた方を通して自由な現れ方をしてもらいたいと、こう思っているわけです。

●花嫁の時の愛

では、エレミヤの第2章に入ります。この辺からエレミヤらしさがそろそろ表れてくる。今日は2章の1節から13節までです。

1エホバの言我にのぞみていう　2ゆきてエルサレムに住める者の耳につげよ

「つげよ」というのは「叫べ」という字です。

エホバ斯くいう　我汝につきて汝の若き時の愛

「汝」というのは「イスラエルの民」のことになるんです、「エルサレム」といいましても。「若き時の」というのは、この民族の若き時というのは曠野時代をいう。

懇切なんじが契をなせしときの愛

「懇切」は口語訳では何と書いてあるかな。「純情」とあるか。これはだいぶいい。「ヘセッド」「愛」という字ですから。「なんじが契りをなせしときの愛」とは、即ちヤーヴェーの神と契

約をなせしときの愛。

曠野なる種播かぬ地にて我に従いしことを憶ゆと　3イスラエルはエホバの聖物にしてその初に結べる実なり

初穂、初めの実、万国の中で最初の、という初子的な存在です。

すべて之を食うものは罰せられ　災にあうべしと　エホバ云いたまえり

口語訳では、

「2「行って、エルサレムに住む者の耳に告げよ、主はこう言われる、わたしはあなたの若い時の純情、花嫁の時の愛、荒野なる、種まかぬ地でわたしに従ったことを覚えている。3イスラエルは主のために聖別されたもの、その刈入れの初穂である。すべてこれを食べる者は罪せられ、災にあう」と主は言われる。」

こちらの方が原文に近い。そういう意味において、口語訳もやはりちょっと参考することが必要ですけれども。ホゼアに似てエレミヤはヤーヴェーとイスラエルの関係を「夫と妻」の関係にここでも例えて非常に出てくる。この「契り」というのは婚約のことで、約束。それでこれは花嫁の時の愛といいまして、約束から実際、自分の民となる、

「我は汝の夫である、汝はわが妻である」

というようなわけでね。

愛　曠野なる種播かぬ地にて我に従いしことを憶ゆと

「初めの愛」という言葉がありますね、黙示録2章4節に出てますが。ホゼア書にも、

「その愛を貫け」

ということが書いてあるわけです。文語訳の「まこと」というのは「懇切」という字を書いて、「まこと」とある。これは純情、若い時の純情、純粋な情熱。それがもう、

「すぐダメになってしまった」

ということを後で言おうとするわけです。「荒野の生活」というものは患難の生活、その患難の中にあって、しかし本当に従っていた者はやはり少数である。

「我に従いしことをおぼゆ」

とありますけれども、現実には従わなかったのが随分いたわけです。

●愛に対するに愛をもって応える

申命記の第2章7節に、

「7**汝の神エホバ汝が手に作すところの諸の事において汝をめぐみ　汝がこの大なる曠野を通るを看そなわしたまえり　汝の神エホバこの四十年のあいだ汝とともに在したれば　汝は乏しき所あらざりしなり**」（**申命記２・７**）

神さまは「共にある」という。「従う」といいましても、神の愛を本当に受けとらなければ、

従うということがいわゆる屈従的な従いになる。しかし、信従、信じ従うこと。常識的な判断を乗り越えて、本当の現実をそこに創造しながら進んで行くのが、我々の在り方です。相対的現実を征服し乗り越え、そして根源現実を創造しながら進んでいく。これが御霊の信の人たちは、あなた方は、それができるんです。それをもって実証する。それでなければ、キリストの弟子というわけではない。その点で、どのような事がありましても、却っていろんなことにでっくわせばでっくわすほど、力強くされていく。

イスラエルの民とヤーヴェーの関係が、神の深い愛の顧みに対して、その愛をもって応える。要するに、信仰といいましても、愛に対するに愛をもって応えることなんです。

「リーベ」（Liebe 愛）

に対する

「ゲーゲンリーベ」（Gegenliebe 応える愛）

という言葉がありますが。しかし、神さまの愛は、必ずしも快きものではないことがいくらでもある。ある時は、これが愛かと思われることがある。けれども、その奥に深い愛がある。だから要するに、

「一切のことを通して、神の愛がそこにある。これは本当の摂理だ」

ということを信じぬく。ということは、根底において一切に拘らず、これは神の愛であるということを受けとることが信なんです。そうすると、これはもう愛に通じていく。決して無理でなくなる。そのようにして神を受けとるということは、必ず力がくるんです。いつも申し上げているとおり、その力の世界が本当の平安です。生命がくる。生命といっても、力といっても、ある時は光と言おうが構わない。

そういうイスラエルの歴史が荒野を通しての神の導きです。ある時は審判すらされた。そういった神とイスラエルの関係が、患難を通して神に信従していく。どこまでもエホバの神の愛を受けとっていく。その意味において、「夫と妻」という愛の深い関係において、このホゼアもエレミヤもそういった預言をさせられているところに、非常にこの二人の預言者の霊的な共通性があるわけです。

●神性をおび神さびている

「イスラエルはエホバの聖きもの」

という。即ち「聖別されたもの」「コーデーシュ」という言葉ですが。これは出エジプト記の19章を開きましょう。

「エホバ、モーセに告げて言いたまわく、汝イスラエルの子孫の全会衆に告げて言え、汝らよろしく聖くあるべし、そは我エホバは汝らの神 聖くあればなり」（出エジプト）

この角度の「聖さ」というのは安息日に関するような面がありますけれども。この

「カードーシュ」「聖い」

という言葉は、日本語の「聖」だけではない。非常に荘厳なもの、荘厳さという気持もその中にある。神の荘厳、それから栄光ですね。

「荘厳、栄光」

とかいう、そういう概念もこの「カードーシュ」という言葉の中に含まれている。「聖い」というと何か澄んでしまっているような感じをすぐ受けるんですけれども、もっと重厚な力強さをもっている。勿論、「聖別」といって別たれる。人間中心の事態から神中心になる。神中心に生きることが「聖」なんです。何か「清い、汚い」というような概念よりも、神中心に生きることが荘厳にして光栄あるところ、これが「カードーシュ」です。だから、神中心です。我々は「聖徒」というが、聖徒というのは、現実にはみんな不完全ですよ、パウロさんといえども。

「ああ、われ悩めるひとなるかな」

という。我々人間というのは要するに相対的な存在ですから、その相対性がどの程度

「いいの、わるいの」

なんて、そんなことを計算したって、これははじまらない。相対性はどうでもいいよ。けれども、自分の魂は神に向かっている。自分の中心は神性をおびている。神さびている。神さびているものがある。それは聖霊をいただいている世界です。聖霊をいただいていると、この神さびているのが聖徒なんです。人間的相対的に聖いなんていうよりか、はるかにそれの方が凄い。凄味をもっている。そういった神中心、私たちにいわせると、キリスト中心です。キリストは、

「自分は何ものでもない」

といって、神一切にしている。これは本当に、それが

「ハイリッヒ」(heilig 聖)

なんです。何か自分が気持をとり澄ましてどうのこうのなんてことではなくて、ぶちまけてしまって、そして、どういうように引っくり返ろうが天極を指す磁石みたいに、必ず起き上がるダルマみたいに、そういうのが「ハイリッヒ」です。だから、キリスト中心なるものが、本当にキリスト中心にその人が生きている。躓いても転んでも大丈夫だよと。そういうような意味において、私たちは「聖」という概念をもっと力強い弾力性のあるものをもってとっていきたい。なかなか註解書にそんなことは書いてないよ。けれども、イスラエルの言語の旧約における「聖」という概念は、本来そういうものがあるけれども、それが今度は律法的に聖ということになってしまって、律法と非常に関係して、

「律法は聖なるもの」

とパウロが言っているけれども。私は今度の「ハレルヤ」に書いたでしょ。

「律法の世界は、福音的絶対とは違う。あの十戒の内容を見ると、大体、否定的な言で

つらなっている。「汝殺すなかれ」「汝姦淫するなかれ」「汝盗むなかれ」であって、「汝人を活かせよ」「汝人を愛せよ」「汝人に与えよ」とは言っていない。人間は福音の愛の力がくるまではどうもダメなものです。」〔ハレルヤ34号（１９７４年１月）第20回夏期福音特別集会（１９７３年８月24～26日、伊豆松崎温泉山光荘にて）第３回集会「キリストの愛」〕

この福音の方はもっと積極的です。キリストの山上の垂訓がそうです。

●神はいずこにあるか

4ヤコブの家とイスラエルの家の諸(すべて)の族(やから)よ　エホバの言をきけ　5エホバかくいいたもう　汝等の先祖は我に何の悪事(あしきこと)ありしを見て我に遠ざかり　虚(むな)しき物

「虚しき物」というのは偶像です。

にしたがいて虚しくなりしや　6かれらは我儕(われら)をエジプトの地より導きいだし　曠野なる岩穴(あな)ある荒れたる地　旱(かわ)きたる死の蔭の地　人の過ぎざる地　人の住まわざる地を通らしめしエホバはいずこにあるといわざりき

いろんな患難にあって、

「神さまを、神はいずこにあるかということを尋ねる。その心がなくなってしまったならばおしまいだ」

という意味でこの言葉は発せられているわけです。

7われ汝等を導きて園のごとき地にいれ　其実と佳物(よきもの)をくらわしめたり

カナンの地ですね。

然ど汝等此処(ここ)にいり　我地(わが)を汚(けが)し　我産業(わが)を憎むべきものとなせり

「産業」というのは、カナンの地を多神崇拝のような憎むべきものにしてしまった。神の恵みとして受けるのではないと。即ち混淆宗教的なことになってきたわけです。

8祭司は　エホバは何処(いずこ)にいますといわず

即ち、

「神さまを求めることをしない」

という意味なんです、この「エホバは何処にいます」という言葉は。傍若無神のような、祭司であって一向に本当の祭司ではない。

律法(おきて)をあつかう者は

これは即ち律法学者です。

我を知らず

律法を知っていても、本当に自分〔神〕を知らないと。

牧者は我に背(そむ)き

「牧者」というのは政治的な営みをしている連中です。

預言者はバアルによりて預言し益なきものに従えり

これは偽りの預言者、職業的な預言者。この「バアル」というのは複数形では「バーリーム」というんですけれども。バアルの神、即ちカナン人が拝んでいるところの偶像神です。農耕の方の神です。こういうわけで、エレミヤが今のイスラエルの民の不信、それから民ばかりでなくて、王侯、教法師、祭司みなダメだという。

9故にわれ尚汝等とあらそわん　且汝の子孫とあらそうべしとエホバいいたもう　10汝等キッテムの諸島にわたりて観よ

「キッテムの島」というのはキプロ島のことのようです。

また使者をケダルにつかわし　斯のごとき事あるや否やを詳細に察せしめよ

11その神を神にあらざる者に易たる国ありや

「自分の神さまを神でないものに換えた国があるか」といって、非常に強いなじり方をしているわけです。

然るに我民はその栄を益なき物にかえたり

神の栄光を、その栄えを益なき物にかえたと。

12天よこの事を驚け　慄けいたく怖れよ

この「天よ聞け」という言い方はイザヤ書にも出てきます。

「天よ聞け、地よ耳を傾けよ」

と。ユダヤ人というのは、非常にある意味において、そういった自然と親しい気持をもっているわけです。人間のように、「天よこのことを聞け驚け」とかね。

とエホバいいたもう　13蓋わが民はふたつの悪事をなせり　即ち活ける水の源なる我をすて　自己水溜を掘れり　すなわち壊れたる水溜にして水を有たざる者なり

あるいは「保ち得ないものである」と。「ふたつの悪事」というのは、活ける水源――今日は「源泉」と書きましたが――

「この源泉なる自分を棄てて、自ら水ためを掘った」

と。このふたつの悪しき事は相表裏するわけです。神さまをここでもってエレミヤは特に「生命の源」と言う。これは非常に注目すべき言葉です。エレミヤの中にも、他にも出てきますが、詩篇36篇には有名な言葉がある。８節から、

「8なんじの屋のゆたかなるによりてことごとく飽くことをえん　なんじはその歓楽のかわの水をかれらに飲ましめたまわん　9そはいのちの泉はなんじに在り　われらはなんじの光によりて光をみん」（詩篇36・８～９）

という非常に著しい言葉です。

「いのちの泉はなんじに在り　われらはなんじの光によりて光をみん」

という。神の光、また神の水。

「**活ける水の源なる我を棄て**」

という。キリストがヨハネ伝4章でサマリヤの女との会話でもって、

「**自分は活ける水をもっている。私のところへ来れば、喉が乾かない。腹から活ける水が泉の如くに湧き出でる**」

というようなことを言われた。キリストは、水を、天来の水を――霊泉だな――霊泉から汲んでいるわけです。

●御霊の水の源泉

こないだ話したかなんか知らんけれども、阿蘇でもって手島君と集会をした時に、手島君は幻を見るから、

「今、天界に湖がある。その天界の湖から今、水が、御霊の水が溢れてくるから、みんなこれを受けなさい」

手島君がそう言って、その瞬間にワーッとみんな祈ったら、全身この全集会にきまして、全部しびれてしまった。今でも覚えています。もの凄いですよ。私にも勿論きましたけれどもね。とにかく、彼はそういった器です。生命の水が湧き出て臨んでくる。まぁ我々の或るクリスマスの話をいつかもしましたけれども、あれももの凄いクリスマスでした。

キリストはその水をちゃんと受けとって、ある外典には、

「**聖霊、滝のごとく**」

と書いてある。聖霊が滝の如くキリストに臨んだという。だから、「水」というようなことを言うわけです。ある時は「火」ですよね。決して矛盾しない。聖霊は、或る時には火である。ある時は風である。だから、地水火風という。地は一切を荷うもの。荷いの愛と、あとはこの聖霊の、水と火と風は全部共通して御霊のことを表現しているわけです。風、大気、気ですね。祈りの世界で要するに――ただ漠然と冥想してもダメです――福音書のキリストは具体的なんですから。私はいつも言っているとおり、

「十字架の門を通って、その先の詩篇23篇の如く、緑の牧場（まきば）、憩いの汀（みぎわ）に入る」

と。「緑の牧場、憩いの汀」というのはもう「聖霊の園」ですよ。キリストの霊風が通っているようなところです。その呼吸が読めてきたら、楽に入れる。何かしらんけれども、すぐ力の世界に入ってしまう。もうね、これを自分の体験にしないことには。なぜパウロが、

「**キリストわがうちに、われキリストのうちに**」

なんて言うかというと、みな御霊のそういった現実です。形容して言っているのではない。普通のクリスチャンは、あれはただ形容的な、まぁキリストと親しいのをあんな形容的な言い方をしたくらいにしか考えてないんだ。形容詞ではない。だから私は、

「聖書には形容詞はない」

と言ったでしょ。聖書には形容詞がない。みんなこれは事実だから。

そういう源泉から離れたらダメだということ。エレミヤはもうその源泉に、エレミヤの魂は汲んでいますから。預言者は正に、どの預言者でもみな、その言葉の本当の意味において、御霊の世界を、霊の世界を生きている。でなければ、預言なんか出来やしませんよ。想像して「エホバかく言いたもう」なんて言ったら偽りだもの。

「エホバかく言いたもう」

というのは、本当にそう響いてくるから。それは勿論、それぞれの時代の次元というものがありますから、相対的な。それによって預言そのものにも段階はあります。けれども、それはみな或るひとつの中心から、源泉から発している。今の詩篇36篇だとかヨハネ伝４章とかというものと非常にこれは共通なところです。

●水ためは即ち文化文明

自分で水ためを掘っている。水ためは即ちいわゆる文化文明さ。人間の相対的な角度から作り出したもの、これはみんな腐ってしまう。ちょっとよさそうだけれども。

卑近な話では、食物でもせっかく源泉的な食物、自然のままの味、それをいろいろ加工して、自然をみな殺してしまって、そして食べているようなのが文明の食物にはたくさんあるわけです。お砂糖をたくさん付けてしまったり何かしてね。虎屋の羊羹なんてのはあまりよくはないんだ（笑）。私たちもいただきますけれども、いわゆる舌にはおいしいけれども、身体にはどんなもんですかね、あれは。それよりか、焼き芋の方が本当に味がいいよ。自然の甘さです。とにかく、焼き芋とかセンベイとかね。結局、焼き芋とかセンベイは飽きない。そして本当の味をもっている。野菜もそれ自身の味をもって、いくつかの野菜を混ぜておでんにすれば、これは素晴らしい味になる。あまり調味料はいらない。味の素なんていらない。味の素はちゃんと自然がもっている。

人間の身体もそうですよ。人間の身体は自分でちゃんと治るようになっている。ことに魂の世界が上からのものを受けたら、絶対です。本当に確信をもっていい。だから、「病気」という、気が病んでいるのが病気なんだからもともと。我々は本当の根源の気をいただいているんだから、もはや何をか疑わんやということで勝っていきましょう。

だから、このエレミヤの２章の13節なんていうものは、我々は読むというと、これを逆に読んでしまう。

「お前さんは、本当にこの源泉から汲んでいるから、素晴らしいなぁ」

と読めてしまう。「ダメだな」なんて読んだりはしない。このイスラエルのためには、これはダメだけれども、こっちはそいつを、マイナスの文句をプラスに読んでしまう。

そういうことを言うものだから、こないだの手島君の連中は、

「まぁ小池先生というのは自由な人だ。あの話はまるで詩みたいですね」

なんて、そう言う。何ともいえない論理ならざる展開がしている。

私は勿論、ヘブライ語やギリシア語をただ軽んずるのではない。軽んずるのではないけれども、

「ギリシア語やヘブライ語を読めるからより聖書が分かる」

なんていうことはとんでもない間違いだと言っている。相対的なものです。一番奥の世界はそいつを乗り越えたところで捕まえてしまう。内村先生が『聖書之研究』なんていう雑誌を出している――しかし、内村先生にしたところで、あれは研究がただ研究ではないから、力をもっているけれども――そうすると、「研究」なんていう言葉に躓いてしまって、

「新しい参考書を読まなければ、より聖書が分からない」

と思ったり、

「ヘブライ語やギリシア語が分からなければ、より聖書が分からない」

と思ったり、自然にそのような気持になっているから、「冗談言うな」と私は言いたいわけです。だから、

「ボロ聖書のボロ訳でいいんだ」

と書いてやった。今度の『生命の光』２月号に出ているから、見てごらん。５万人が見るそうだ。手島君の集会はもう今、全国で５万何千人。「イエスの御霊教団」というのはまたでっかい。数の上でいうとちょっとそれを上回っている。イエスの御霊教団、その次が「神の幕屋」のグループなんて書いてある。これはキリスト新聞に出ている。我々は神の幕屋のグループには入ってないけれども、それと同質なまた特別な存在です。そういうわけで、皆さんは非常に歴史的な大事なあるひとつの一角を承っていることを自覚してもらいたい。

●御霊の神わが内にいたもう

それで、この源泉ということ。私たちの肉体でも、コーヒーや紅茶よりも本当に喉が渇いた時は水ですよ。水は最高の味をもっている。味のないものが味をもっている。色のないものが色をもっている。空気は色がない。これは無限の色をもっている。水は味がないが、無限の味をもっている。味の素というのは水のことだよ。元素の上でも水素というのは凄い。あなた方は深く祈ろうとしたら、コーヒーや紅茶を飲んだらダメだよ、水を飲んでいないと。水を飲んでいないと、魂に毒だから。……

それから、火というなら、太陽の光です、自然界では。火というなら太陽の光。太陽の光を冥想しながら、水を飲みながら、いくというと、霊的な祈りの世界には道は近い。どうぞ、とにかく祈りの世界で深くなってください。そして源泉を汲む杓（ひしゃく）は何かというと、祈りなんです。祈りがないところには御霊は来ない、ただ考えているところには。

「我思う故に我在り」

なんて、ちっとも在りはしない。

「我祈る故に我あり」

と。今日初めてこれを言う。祈りは本願を受けとること。本願を受けとるところに本当に「在る」ということがある。こちらには何もないですよ。何もないものが、無者が本当の有者なんです。キリストみたいな。そうなったらもう勝負ありですから、皆さん、何も心配は要らん。何がどうなっても大丈夫です。そこで、ここにエレミヤがしきりに、

「エホバは何処（いずこ）にいますといわず」

という。「神は何処にあるか」ということを私は書きましたね。

「神は何処にいますか。キリストを見よ。キリストは何処にあるか。御霊のひとを見よ。御霊のひとは何処にあるか。我なり」

と。そういうように煮詰まってこなければダメですよ。即ち、

「神は何処にあるか」

ということは結局、煮詰めてしまうと、

「わが内にござる」

と。御霊の神わが内に居給う。「偕（とも）にある」ということと「内にある」ということが切っても切れない関係、偕在（かいざい）と内在です。そういうことになったら、もうしめたもの。結局、

「わが内にある主よ」

という、ここに極まる。

「天上天下唯我独尊」

というけれども、何もお釈迦さんが生まれた時あんなことを称えたとは私も思いませんけれども。しかし、お釈迦さんの「唯我独尊」の「唯我」というのは「宇宙我」ですよ。

「宇宙我が本当にこれだけが尊い」

と。その宇宙我と自分が一つになっている。即ち、

「凡我一如」

という世界があのお釈迦さんのやはり最後の境地です。これはキリストも同じことですよ。

「我を見し者は父を見しなり」

という。だから、

「我を見る者はキリストを見るなり」

と、この破れ器がそう言うことができるということは、全くぶっつぶれているから言えるんですよ。ぶっつぶれなければ言えないですよ、そんなことは。ぶっつぶれているやつが本当にそれが言える。そういう意味において、もう皆さんは本当の自信ならざる自信をもっていただきたい。

「どうもこの頃は少し信仰状態がおかしいので、ちょっと自信を失いました」

なんて、なにをぬかすかと。信仰状態がおかしな時こそキリストはやって来ます。

「よし、私が助けてやるぞ」

と。そうですよ。自分を問題にしているから、

「おかしいの、おかしくないの」

なんて言い出す。これは百年たったって変わらないんです、みんなおかしいんです（笑）。だから、「おかしくないもの」を入れたらいいんです、おかしくないものを。キリストはおかしくないんだから。そして、キリストは無条件に入ってくださるというんだから。おかしくないところにおかしくないものが入ってくるのではない。おかしな奴のところに入ってくる。

手島君だって、自分のことを

「しょうがない野郎で」

といって、自分を吐き捨てるようなことを言っていたことを私も覚えていますけれども。みんなそうですよ。まぁ無教会の先生方でも、内村先生でも藤井先生でも塚本先生でも、自分を本当に

「**罪びとの首**（かしら）」

という自覚はもっていた。だから、本当に

「十字架で行こう」

と言う。それで、御霊の世界をもっと積極的に言っていただきたかったのだが、そこに無教会の限界があるから、手島君だの僕だのがそこを突き抜けて、始めているんだから。そこをあなた方がもっともっと前進してくれなければ。もうたまらんですよ、これは。全然自分なんか問題でなくなってくるでしょ。自分を問題にすればするほど、ダメになってしまう。そんなものはもうキリストが全部それを溶かしてしまう。わかりましたね。

●源泉を汲めばこちらが泉の存在

それが即ち、源泉を汲めば、今度はこちらが泉の存在となる。この御霊の信仰の世界は、

「言葉が分かる分からん」

ではない。

「響きを受けとるか」

ということなんです。だから、中学生でも高等学校生でも、この響きを受けとる角度になれば、グングン入ってくる。ちっとも難しくはない。難しくしているんです、聞く方で。ちっとも難しくはない。どうぞ、皆さんはこの集会ごとに、

「何か知らんけれども自分に力が入ってきました」

といって進むから、集会はやめられない。惰性でやっているのではない。これは曠野を一緒に歩いて、そしてオアシスに来て、砂漠の中でこの源泉に水を飲んでいる。ラクダのように。そして、進んで行くわけだ。だから、正に人生のオアシスの源泉はこのキリストである。キリストの泉は何処でも湧いていますよ。ここは湧かないという所はない。

「エルサレムの聖地に行かなければ、聖書はよくわからない」

なんて、冗談いうな。その点で手島さんのグループは聖地巡礼みたいなことばっかりやっているけれども、まぁそれはどうかと思うんだ、私は正直。

「今年は、先生、行きましょう」

なんて、こないださかんに誘われたけれども、それには「うん」とは言わなかった（笑）。

「聖地は至る所にあり。一体、あなた方はよく聖地にいらっしゃるけれども、あそこではっきりとキリストのことは勿論言っているんでしょうけれども、随分向こうでは変に思うでしょうね。キリストを認めないご連中なんだから、イスラエルのユダヤ教の連中は。それが、キリスト一点張りとでもいうような人たちがユダヤ人と仲良くなっているが、ユダヤ人をやがて改宗させようと、「敵は本能寺にあり」式な気持で行くなら、それは分かるけれども。」

と。まぁそれは勿論彼らもそれを念願しているんでしょうけれども。マルチン・ブーバー〔Martin Buber,1878～1965、オーストリア出身のユダヤ系宗教哲学者、社会学者〕も言っている。

「パウロが一番悪い。パウロはユダヤ教時代は非常に良かったけれども、『律法の義につきては責むべきところなし』と、それは良かったんだけれども、『これを塵芥の如く思う』なんて言ったのはとんでもない間違いだ。そしてもう十字架なんて言ってみたり」

と。パウロはユダヤ教の人には目の敵（かたき）なんです。

「パウロはキリストを目の敵にしていたのが引っくり返ったのだから、なぜそのことを悟ってお前たちも引っくり返らないかと、あなた方は言ってますか」

なんて、こないだやったんだけれども。まぁそこまではなかなか言えないらしい。そういうことですよ。私はなぜ、このキリスト一点張りを言うかというと、そこなんです。イエスは、「父なる神」と言って、そして

「律法の一点一画もゆるがせにしない」

なんてなことを言うものだから、

「イエスはまだ良かったが」

なんて言うんだよな、ユダヤ教はある意味においては。けれども、私たちにとっては何といっても、旧約をアウフヘーベンしたところの、そして本当に神の御言を一番深い意味において活かし、福音を、本当の救いをもたらしたキリストです。だから、私たちはキリスト一点張りです。

それで、源泉の所在は何処にあるかがはっきりしたら、それでよろしい。終わります。

讃美歌501番「いのちのみことば」を歌いましょう。